風の末裔シリーズ・2nd シーズンの2

～　金鈴花 ツバクロ ～

灰色の深い森。
針のような細かい枝が縦横に重なり、薄暗い異空間を作る。僅かな隙間から細い木漏れ日が差し込み、枝々に立つ森人を照らす。中央の立派な髭を湛えた森人が、正面の来訪者に仰々しく話し掛けた。
「何時もの通りじゃ。我らは静観する。どちらにも手は貸さん。手出しもせん」
来訪者は鈴虫のように軽やかに応える。
「それで結構です。御協力感謝致します。条件はいつも通りで」
「誓いを立てましょうかの？」
「いえ、我等の間柄です、森人の長老殿。今回はご挨拶を兼ねて。御健勝そうで何よりです」
「そなたもの。…蒼の狼殿」

森人の長老は、すっと立った真白い甲冑姿の女性の後ろの、濃い縁取りの目をした青年を見やった。
「連れがおるとは珍しいの。後継かの？」
「いえ、里の若輩者でございます。後学の為に同道させております。お気になさらず」
ツバクロは、カチコチで目眩がして、立っているのがやっとだった。
「ナンデボク、コンナトコロニ、イルノダロウ……？」

思い返す事、三日前。
蒼の里でなかなか頑張って短期修行を終えたキビタキを送って、大陸まで飛んだ。
砦に着いた時、王の行軍はまだ到着していなかった。出迎えの蒼の狼に、皇子の身柄と長の手紙を渡し、任務を終えてほっとひと安心した所で、手紙に目を通した蒼の狼が、ツバクロを見つめて静かに言った。
「…分かりました。お引き受け致しましょう」

≪このツバクロは、蒼の里でも飛び抜けて、頭脳明晰眉目秀麗な私の自慢の弟子です。将来は里のブレインとなって活躍して貰う予定ですので、外交の現場とか、駆け引きとか、小賢しい事とか、ざっくりと教えてあげちゃって下さい。
お願いしますね～。

P・S　食べちゃダメだョ　≫

狼に手紙の内容を告げられて、ツバクロは血の気が引いた。

聞いてないよおぉぉ――!! 長…、冗談をホントに、しますかぁ?!

蒼の狼は相変わらず凍り付いたような無表情で、今一度手紙を読み返している。

「時に、ツバクロ殿?」

「…ツバクロで結構です」

「では、ツバクロ。この最後の、『タベチャダメ』…って、どういう意味なんでしょう? どうせまた、兄上特有の笑えない冗談なんでしょうが。里で流行っているのですか?」

「……長……ウラミマスヨ……」

そんな訳で、大陸の異種族の間を渡り歩く蒼の狼に着いて、眉目秀麗な青年は、こうして後ろに突っ立っている。

モンゴルの大王が大陸に侵攻するにあたって、地元の人外への根回しは不可欠だった。蒼の狼の上手い所は、強いて協力を取ろうとしない事。ただ、傍観していて欲しい。相手方に手を貸さないで欲しい。

先方にとってはそれ程負担ではない条件に、こちらからはお得感に思える条件を提示する。すなわち、彼等の居住地は侵さない。

約束を交わしても、お互いにとってそれ程変化はない。欲しいのは先方の心なのだ。

蒼の狼は移動の間に、意外と丁寧に教えてくれた。

長は、将来的に自分にこういう風になれ…って考えなのだろうか? しかしツバクロには実感がなかった。この蒼の狼みたいに、其処に立っているだけでドーンと迫力のあるヒトだからこそ出来るのであって、小僧っ子の自分には真似しようがない。

「さて、蒼の狼殿、固い話はここまでにして、酒席を用意致しました。西方の珍しい酒を入手しましたぞ」

「それは楽しみですね」

蒼の狼はツバクロを伴って、灰色の林間に設えられた酒席に付いた。後方に座すツバクロにも盃が回ってきた。えーと…、飲んでいいのかな?…と、戸惑う前に、

「長老殿、里では、修行中の身は飲酒は禁固なのです。あしからず」

狼がツバクロの盃に手を添えて、酒は注がれずに済んだ。そんな決まりはないのだが、ツバクロは黙って、談笑する狼の後ろで小一時間、手持ち無沙汰にぼぅっとしていた。

「二人一緒に飲んでいたら、一服盛られていましたよ。狸親父

ですからね」
　帰る道々、狼は涼しげに言った。
「一服盛ってどうしようってんです?!」
「さあ…、ワタシ達の身柄を拘束すると、異種族間でいろいろと無理が通るようですよ。または仲の悪い西の部族を威嚇するか…、どっちにしても小者な事しか考えていません。モンゴルの大王にどうこうなんて度胸はありませんよ。それにしても酷い味だった事……」
　と言いつつも、狼はケロリとしていた。後ろから見ていても結構な量をあおっていたようだったが。こんなヒトみたいになれる訳ない。ツバクロは頭から挫けていた。
　一緒に来たがるキビタキに、貴方はまず戦の表参道から学びなさいと、狼は行軍中の王の元へ送り届けた。子供には色々まだ早いのかもしれない。
「だいたいの部族は回り終えましたね。駆け足でしたけれど、少しはお役に立てましたか?」
「は…はいっ」
　と言う事は、もう帰れるのかな?
　モンゴルの大王が大陸の拠点にしている砦は、石で築かれた古い城を利用した物だった。
　城壁に立つ塔の一つが『戦神の場所』として、一般兵士の立ち入りが禁じられている。塔の根元に草の馬の厩があり、二人はそこに降り立った。
「あ……」
　蒼の狼は城壁から顔を出して、地上を見下ろした。
「王…!」
　凍り付いた表情が崩れる。本国を出立した王の行軍が、今到着したのだ。常駐の兵士達が慌ただしく出迎えている。
「貴方をまだ王に紹介していませんでしたね。今日中に目通り叶うよう手配しましょう」
「あの…、僕…、えと、王に、会わなければいけないですか?」
「……」
　狼の表情がまた固くなる。ビンタされるのか?
「王は貴方を取って喰いはしませんよ」
　狼はそっけなく言って、階下へ降りて行った。
　ツバクロはほっと息を付いて、塔の部屋に戻った。階上の部屋は蒼の狼の居室で、その下の小部屋に、臨時に寝具を入れて宛がわれていた。

「早く里へ帰りたい……」
へとへとになって床の寝具に倒れ込む。

「ふうん…」
声がして、ツバクロは飛び起きた。誰かが近付く気配なんて全く分からなかった。
入り口に半身もたせ掛けて、人間の男性がこちらを見ている。鹿皮の肩当てと分厚いマントの旅支度に、額には金の輪兜、その下の眼は燃えるように強く、吸い込まれそうだ。
脇からキビタキが駆け込んで来た。
「ツバクロ―!! ずるい!! 俺が狼に付いて回りたかった」
「貴方は王に付いて学ぶ事が山ほどあるのですよ」
狼が後からゆっくり現れた。
先の男性が狼に振り向いて言う。
「これが君の若いツバメ? なかなか可愛いじゃん」
ツバクロは立とうとしてよろめいて口をパクパクさせている。
「ツバメ…ではなく、ツバクロです、王君」
ツバクロはパクパクのパの状態で止まって動けなくなった。
「親父ィ、俺の先生なの!! 礼を尽くしてくれ!」
王は進み出て、棒みたいになっているツバクロの手を握った。
「トルイが世話になった。心より感謝する。あんたらの話ばっかするんだ、こいつ。妬けるね」
「は…はい…恐縮です…」

＊＊＊

「テムジンだ。色んな肩書きがあるけれど、君に対しては、トルイの父親って事でいい」
モンゴルの大王は想像していたより気さくでフレンドリーだった。しかし、その目の奥に他者の介入を許さない強い信念が燃えているのは分かる。それが分かる者には、どんなに気さくにされても、緊張は取れない。ツバクロもそうだった。

夜…、城の一室。
トルイが、…ツバクロの前ではキビタキなのだが…、ウトウトとねむかけを漕ぐ。机には、蒼の妖精の文字で、様々な記号や図形が書かれた石板。
「キビタキ」
正面に腰掛けたツバクロが両手を顎の下で組み、声を掛けた。
「…ん……はっ…ごめん!!」
「やっぱり疲れているんだ。ここまでにしよっか」
「ごめんなさい…。まだ大丈夫」

部屋の入り口をノックして、蒼の狼が現れた。
「トル…えと、キビタキ、ツバクロも今日はお疲れなの。貴方も、もうお休みなさい」
プライベートな時は、母親らしい…というより、女性らしい口振りになるんだな…と、ツバクロはこの時初めて思った。
トルイの居室を後にして、燭台を持った蒼の狼に着いて塔に向かう。
「すみません、こんな事、頼んでしまって…」
「い、いえ」

王が到着した夕方から、雨が降り出した。
草の馬に水はあまり宜しくない。出立をどうしよう…と、ツバクロが考えている頃…。キビタキが、自分の兄弟子は里の学校の座学を半分の年数で首席で修了したなんて自慢したもんで、
「じゃあ、ちょっと教えて貰え。どうせ、この雨じゃ当分出立出来ないだろし」
と、親父殿の鶴の一声でヤブヘビを喰らっていた。
「でも、勉強は蒼の狼殿に見て貰っていたと言っていましたが」
「ワタシは、里の修練所はちゃんと修了していないのです。四年目の途中でした」

「あ……」
　このヒトがまだ本当に子供の時に里を後にして、ずっと一人だったのを思い出した。
「す、すみません」
「あら、謝らなくていいんですよ」
　蒼の狼はツバクロを向いて少し微笑んだ。燭台に照らされて、凍り付いている以外の顔を初めて見た気がする。
「では、おやすみなさい」
　部屋の前で別れるまで狼はその顔だった。いつもはこのヒトといると緊張して、早く部屋に帰りたく思った物だが、今は部屋に着いたのがちょっと残念に思えた。
　狼は上の自室ではなく、来た道を引き返して行った。
「…王との間に子供をもうけた…って事は…、やっぱ、王の愛人…になるのかな」
　何だかちょっと複雑な思いが胸を過った。昼間出会った太陽のような王と、細い銀の三日月のような狼は、あまり噛み合わない気がした。

　翌日も朝から雨だった。草原育ちのツバクロには、こんなに降り続くしょうしょうとした長雨は、調子が狂う。
「親父殿の見立てでは二、三日続くって」
　キビタキは嬉しそうに石板を並べながら言った。
「君、そんなに座学好きだっけ？」
「だって雨が上がったらツバクロ行っちゃうし」
　里にいる間から続けて学んでいるのは、魔法に関する文字や力の法則だった。変化する自然と環境の中で、自分の力をいかに有効に使うかって事。それが分かっていないと、濃霧の中で雷なんか起こして、本人がエライ目に遭ったりする。
　それぞれ別の力を持つ妖精には学んでおくべき事だけれど、人間の間で生きて行くキビタキにはあまり必要ないように思える。だが、キビタキは法則の内容より、ツバクロに物を教わるって事に価値を感じているみたいだ。

　王は到着するや処々に指令を発し、今朝から雨をついて近隣の属郷を回っている。近辺の郷主の怪しげな動き等は、予め蒼の狼が調べあげ、報告してある。
　後は王本人が出向き、楔(くさび)を打っておくという、鮮やかな連携だ。良からぬ事を企んでいた者は、本国から来たその日に、知り得ぬ事象を知っている王に、畏れを成して考えを改める。

大陸の深部にはなかなか入り込めない。今はそれぞれの範囲を守りつつ、使者を送り牽制し合っている状態だ。
「そんなに無理して領土を広げなくていいのに…」
これがツバクロの素直な感想だが、勿論口にはしない。人間には人間の法則があるんだろうし、何が正しいかは誰にも決められない。決まるのはずっとずっと後世の歴史書の中で…、だろう。
ただ、人間と妖精の中間で翻弄されそうなキビタキの事は、気掛かりになって来た。今は父親に付いて人間の道を歩むつもりだろうが、将来もし、こちら側に携わる人生を選ぶなら…多少里の掟を曲げてでも、助けになってやりたい。ツバクロはそれ程、この赤毛の子供を好いていた。

そんな折り、それは起きた。
雨があがった朝、暇乞いの伺いを立てようかと窓から空を見ていたツバクロの部屋を、蒼の狼が訪れた。
「こちらに、皇子は来ていませんか?」
「いえ…どうしたんですか?」
「見えないのです、今朝から」
「……?」

キビタキとはタベ部屋でおやすみなさいを言って別れたきりだ。明日には雨が上がりそうなので、勉強は休んで、ちょっと子供の頃の話なんかをしていた。
「王は?」
「いないと気付いてすぐ私の馬で飛び立ちました。咄嗟の勘が働いたようで」
「砦の外に出たっていうんですか?!」
「ここは、入るものには水も漏らしませんが、出るのは意外と安易なのです。それに……」
狼は外を見て顔を上げた。横顔は今までに無い不安な危うさで一杯だ。
「王の勘は当たるのです…」
「では僕も行きます」
ツバクロは帯剣して城壁に走った。自分の馬に手を掛けた所で、狼が声をあげ、王がキビタキを乗せて降下して来た。
キビタキは無傷だった。自分が何をしでかしたかイマイチ自覚していないようだが、両親の沈痛な面持ちで事態を察して、神妙にしている。
「森の中で、東の森人といた」
「……」

「連れ去られる所だった」
「すみません、そういう事教えるの、後回しにしていました」
「ああ、頼んだよ」
王はそれだけ言って去りかけた。
「狼は悪くないよ!! 俺が自分で分かってなきゃならなかった…んだ……」
キビタキは王の後ろ姿に叫んだが、最後の方は力がなくなった。狼が肩に手を掛けたからだ。
王は振り向いて優しい声で言った。
「ああ、そうだな。しかし、今度からは自覚するんだ。ここは平和な本国と違うのだよ」
マントを翻して立ち去る姿は、静かだったが、誰にも何の口出しも差し挟ませない緊張感があった。
本来ならビンタを貰う所なんだろうが、王の優しい言葉の方がキビタキには堪えたようで、狼もそれ以上は責めなかった。
「先に貴方に教えて置かなかったワタシの責任です。城の外は皇子にとって、危険な事だらけなのですよ」
「ごめんなさい…」
キビタキは素直に謝った。
「人間だけでなく、妖精も危ないって思わなかった。もっと珍しい植物の場所を教えてくれるって言うから…」
「……?」
いぶかる二人の前で少年は、ポケットから何か掴み出し、ツバクロの前に突き出した。
「え…??」
差し出した掌にポロポロと落とされたのは朝露に濡れた植物の種…。
「ここへ来た時、上空から見ただろ、黄色の凄い花畑。ツバクロ、あんな花、里でも咲かせたいって言ったじゃないか」
「ああ、うん、…え? それを…採りに行っていたの?!」
ツバクロは唖然として赤毛の子供を見た。仔犬のような澄んだ銀の瞳…。狼が何か言いかけたが、ツバクロは聞いていなかった。踵を返して駆け出していたのだ。

＊＊＊

自分でもどうしてそんな事をやらかしたのか分からない。そして自分の何処にそんな大それた度胸が潜んでいたのかも。とにかくツバクロは王を追った。
王は既に自分の執務室に戻っていた。
いきなり扉を開くと、王に対峙していた何人かの将が、驚き振り向いた。彼らにはツバクロは見えない。

「風だ…！」
王は立ち上がり、決め付けるように言った。
「風が俺に用事らしい。軍義は後にしてくれ。人払いを」
将達は素直に従った。戦神(いくさがみ)が憑いているという噂の主君は、時々そういう事を言う。そして戦神が教えたかと思う位、戦場の知識を知り尽くしている。

扉が閉められ、ツバクロは王と対峙した。今の自分の状況を冷静に考えたらクラクラする。しかし持って来た言葉を飲み込む訳には行かない。王は射るような眼差しでこちらを見ている。
ツバクロは意を決した。
「あの皇子は…戦場に向かないと思います!!」
…王は、何とも言いようのない顔をして、ツバクロを見た。怒っている風でもない、むしろ驚きの混じった目だ。
「戦場に向く子供なんて…いないよ」
王は返した。至極当然の答え。
「なら、どうして、こんな危ない所に連れて来るんです?!」
「俺の息子だから。俺と蒼の戦神の子供だから」
「……」
王は大きな机の向こうから出て、窓辺に歩を運んだ。

「俺の親父、知ってる? イェスゲィ・バァトルって、ちょっとした勇者だった。俺が子供の頃、草原を統治していた」
名前くらいは知っている。でも、何で今そのヒトを持ち出すんだ?
「あのヒトも、人外を見て、通じ合う事が出来た。多分、その親父も、その親父も…。遠い先祖に蒼の妖精の血が入っていたんだ」
「……」
「解るかい? この世のハーンと成る為には、人外と通ずる事が必要だ。しかし……血が薄くなっちまったんだろうな。俺と人間の正妃の間に生まれた子供では、もうその資質を引き継ぐ事が出来なかった」
「……」
ツバクロは背筋がざわついた。その先は聞きたくない気がする。聞いてしまったら引き下がれなくなってしまう。
「だから……血を入れ直す必要があった。世界に覇権を広げる為に」
夕べの燭台に照らされて静かに微笑んだ女性の顔を思い出す。よろめいた背中に、冷たい石壁がぶつかった。
「長と……約束しているって……皇子は平凡に草原の領主にな

るって……」
「後々な。狼の希望でもあるし。でも、いつ…とは、約束していない！」
ここで王は、蒼の妖精の青年を鋭く睨んだ。ヒトの目とは思えない光を放ち、開いた口の中が血の色に見えた。
「それ迄は、その資質を存分に生かして、この父の為に働いて貰う!!」
「利用しているっていうのか?!　皇子も…!!　蒼の狼も…!!」
「ああ！　利用できるものは何でも利用する。人間の世界は、お前さん達のお綺麗な理屈は通用しないのさ。俺は幸運だった。妖精の娘が向こうから寄って来てくれたんだからな！」

ツバクロは思わず剣に手を掛けた。自分でも驚く行為だった。それほど頭に血が昇っていた。
「ふうん、斬るのか？　うん、まあ、お前さんの剣なら、斬れるかもしれないな。でも、蒼の妖精が人間を斬るって、どういう事なのか、解っているな?!」
「……!!」
解っている……最大限のタブーだ。それをやってしまうと全ての摂理が壊れる。魔のモノに身を墜とす事となる。
「お前が、トルイと狼の為に、そこまでする覚悟があるんなら、斬られてやってもいい。でも無いだろう。お前の全てを捨てる事になるんだ。優等生の人生も、長の一番弟子の地位も…」
「……」
ツバクロは固まった。その通りなので何も言い返せない。
「トルイに色々教えてくれて感謝している。お前さんの知識、居る間に出来るだけ詰め込んで貰いたかったからな」

もうツバクロには何を言い返す気力もなかった。脱力して後退りすると、丁度扉が開いて蒼の狼がいた。
「狼……」
狼は凍てついた表情のまま室内に入り、王の横に立った。
「こいつはお前さんと違って、全てを捨てて、俺の所へ来てくれた。全て承知の上で、俺と居てくれるんだ」
ツバクロは乾いた表情で狼を見た。狼は静かに頭を下げた。
「皇子を、有難うございました。長に宜しくお伝え下さい……」
ツバクロは後退りして扉を出た。

＊＊＊

気が付いたら、城壁の自分の馬の前にいた。キビタキがびっくりした目で見上げている。

「ツバクロ…？　どしたの？　顔が真っ青…」
「キビタキ!!」
ツバクロは思わず子供の両方の肩を掴んだ。子供は仰天して目をぱちくりしている。
「……」
しかしツバクロは放心したように、その手を緩めて放した。この混血の子供に、自分はどれだけの責任を持てるっていうのだろう？　この子は、人間として定められた人生を送るしかないのだ。
「ツバクロ？　なんで泣いてんの？　俺と別れんの、そんなに悲しい？」
「あ、ああ……」
ツバクロは乱暴に目をこすって、馬を引き寄せた。
「もう行っちゃうの？」
「ああ…」
早く一人になりたかった。もっと情けない醜態を見せてしまいそうだ。
「俺、習った事、毎日復讐するよ。次逢う時、もっと立派になっているから」
「ああ……」
ツバクロはそれ以上聞いていられなくて、強引に馬を舞い上がらせた。子供が何か言っているが、すぐ聞こえなくなった。
高く……うんと、高く舞い上がる。
風を捉えてツバクロは、自らの限界まで高度を上げた。耳がキンキンして、空中の水分が氷の粒になる。
馬がさすがに嫌がって抵抗した。
「ああ……すまない……」
ツバクロは静かにジェット気流を読んだ。故郷の草原に一直線に吹き抜ける音速の風。
「…来た…!!」
風の波に乗り、草の馬は一瞬で運ばれて行った。今は何も考えたくない。早く里に帰って、妖精の日常に戻ろう…。
眼下、西方に王都が霞んで見え、母国へ戻ったのが分かった。いい加減凍えた馬を労って、一度下降する。白い森で休もう。
「……？」
白い森の手前の岩山で、知った顔二人が手を振っている。デジャヴ…な感覚に襲われた。
「ノスリ！　カワセミ！」

「お帰り、ツバクロ」
久し振りの仲間だ。ツバクロは心からホッとした。
「どうしたの？　もしかして出迎え？」
「そんな暇あるか。お前がいなくてこっちはてんてこ舞いなんだ。なのに、こいつが…」
ガタイの大きいノスリが、細っこい相方の腕を掴んで引っ張り上げた。いつにも増してフラフラ感一杯だ。
「ごご……ギモヂワルイ……」
カワセミは里で長に次ぐ術者なのだが、予知だの透視だのをした後は、いつもこうなる。まだ自分の力に振り回されっ放しなのだ。それでもフラつきながら、ツバクロの肘をガッシと掴んだ。
「キビタキ、どうだった?!」
「え…？」
「笑ってた？　不安顔だった？　もし、君と別れたとき笑っていたんなら、ボクの予知は外れてる。不安顔だったら……キビタキは危ない目に遭う、…凄く!!」
「・・・?!」
「長には鷹を飛ばした。どっちにしても、ここからじゃどうしようもない。一番早く行けるのは、ジェット気流に乗れるお前だけだ」
「……」
しかし、ツバクロは下を向いて唇を噛んだ。
「どうした？　戻ったばかりで疲れているのは分かるが」
「僕なんかが行ったって…」
「え…？」
「狼もいるし、勘の良い王も付いているし…。第一、あの子は、僕達とは違う世界で生きる、人間じゃないか!!」
ノスリもカワセミも困った顔を見合わせた。キビタキが不安顔で見送ったって時点で、何かあったのは察しが付いたが。
「ねぇ、ツバクロ……」
カワセミがノスリに支えられながら身体を起こした。
「ボク達、あの夜、ここで、キビタキに名前を授けた。もうその時から、ボク達の間には繋がりが出来ているんだ。それは一時の感情で切れてしまうような細いモンじゃない。確かにあの子は、妖精とは違う所で生きる。でもボク達、それが分かった上で『人間に名前を授けた』筈だよ」
ツバクロはマジマジとカワセミを見た。
「運命が何をどう操ろうと、ボク達は切れない。未来はボク達

のモンだ。そうだろ？」
　黙っているツバクロの両手を掴んで、カワセミは目を閉じる。
「待って、今、ビジョンを……送るから…」
　ツバクロの頭にいきなりハッキリした映像がフラッシュした。初めての体験だった。それを見た瞬間、背筋が凍って、彼の頭から色んな意地っ張りが吹っ飛んだ。
　思わず目を上げると、慣れない事をやらかしたカワセミが、フラフラとへタリ込んでいる。
「ああ…もう、ボクって……」
　ツバクロは馬を引き寄せた。
「ノスリ、カワセミを頼む！」
「おう、お前は、キビタキを頼んだぞ!!」

　二人の仲間に見送られて、ツバクロは今一度成層圏まで舞い上がった。
「すまない、後で埋め合わせは目一杯する！」
　主の無茶な頼みに、忘れないでョ…と言う視線を送り、草の馬は再度風に乗った。氷の粒が顔に当たる。
「キビタキ…!!」
　＊＊＊

　砦が眼下に見える。
　高度を下げながら、さっきビジョンで見せられた地形を捜した。何処か、高い切り立った崖…、そこで、キビタキが何か巨大な怪物に襲われる！
　城から草の馬が上昇して来た。蒼の狼だ。
「ツバクロ！　皇子を…、皇子は一緒ではなかったのですか？」
「連れて行く訳ないでしょう!!」
　思わず怒鳴ってしまった。
「じゃあ、また城から居なくなったんですね?!」
　狼が眉間にシワを寄せる。今までにない不安な顔だ。
「あの後すぐ、この馬で飛び出したんです。でもすぐ、馬だけ戻って来て…」
「……」
「う…馬から…墜ちた…んで……しょう、か…？」
　狼は自分で言った言葉に気絶しそうだった。いくら風が使えても、あの子の力じゃ、この高度から墜落したら……。
「しっかりして下さい!!」
　ツバクロは大声を出して、焦然とする狼を呼び戻した。
「僕が見たビジョンじゃ、生きていました!!　地上で!!」
「ビジョン…？」

「とにかく、捜しましょう。切り立った崖、ありますか?」
ツバクロは道々、本国でカワセミが予知した事を伝えた。狼はもう凍て付いた表情はしていなかった。心細い母親の顔。
「王は?」
「城にいます。大国よりの使者が来るんです」
「…!! いい気なもんだ!! 自分の息子が…」
「……」
狼が黙って俯(うつむ)いたので、それ以上は言わなかった。これを切っ掛けに、あの王から離れる事を考えてくれないだろうか…?

切り立った崖に二本杉…、それだけのヒントで、まさにビジョンぴったりの場所を、狼は思い至ってくれた。
そして、その手前で、木々の間のキビタキを発見した。しかしメデタシではなかった。愛息子は思いっきりヤバ気なモノに追い掛けられていた。
「大ムカデ!!」
「僕が引き付ける!! キビタキを救い上げて!!」
ツバクロはムカデの前に馬で躍り出て、右に左に翻弄した。ムカデの気がそれた息子を、蒼の狼が下馬して助け起こす。
「早く乗って」
「ごめんなさい…あの…」
「早く・・あっ」
一瞬の出来事だった。疲労したツバクロの馬が、脚をもつれさせて転んだのだ。投げ出されたツバクロにムカデが襲い掛かり、その一歩後ろは崖だった。
ツバクロは剣を抜いて、牙を剥いたムカデの口に突き立てた。しかし、勢いの付いたムカデは止まらず、もろともに崖から落っこちて行った。
「ツバクロ!!」
二人は崖の淵に走った。
ムカデが落ちながら、剣の刺さった所から真っ二つになるのが見えた。ドオオン、ベシャリという音が、上まで響いて来る。
ツバクロは? ムカデの下から這い出す姿がある。無事なようだ。

「狼…、ツバクロ、高い所から飛び降りるの得意だったから…。今も、風で落ちる早さを弱めたんだと思う」
狼は放心したように崖下を凝視していたが、ふと我に返って、息子に向き直った。ビンタ貰ってもしょうががない……キビタ

キは歯を喰い縛った。
しかし、細い腕が背中に廻り、しっかと抱き締められた。
「…無事で良かった…」
本当にヤバかったらしい。普段の狼が冷静でいられるのは、一見危なそうでも、実はどうって事ないからだ。以前の黒虎も、狼から見たら猫みたいなモンだった。
その次に狼はツバクロの馬に近寄った。馬は地べたにヘタリ込んで脚を投げ出していた。
「大丈夫なの?」
狼は脚を調べてほっと息を付いた。
「挫いてはいるけれど、大丈夫。草の馬は人の馬より体重が軽いから、例え折れても命に関わる怪我にはならないわ。でも無理はさせられないわね」
狼は心細げな馬の鼻面を撫でながら立ち上がった。
「まずはこの馬と貴方を城へ運びましょう。それからツバクロの所へ行くわ」
「今すぐ行ってあげてよ!」
「貴方と脚を挫いた草の馬をここに残して、またナニか来たら、貴方はツバクロの馬を護り切れますか?」
狼はいつもの顔になった。
「私の馬だってさすがに三人乗りは無理です。それにツバクロは大丈夫ですよ。…ほら…」
再度崖下を見ると、ツバクロの周りに何人かの人影が見えた。キビタキには誰だか分からなかったが、狼が大丈夫って言うんなら、大丈夫なんだろう。
二人乗りの草の馬と、脚を引きずった馬は、砦に向けてゆっくり飛び立った。
「……」
ツバクロは目を開けた。…頭が絞られるみたいにズクンズクンする。
空中で風を起こして身体を浮かせるのは、自分の得意技だ。それはどんなに空気が薄くたって自信があった。高い山への出向を任されるのもその為だ。例え成層圏から落ちたって、大丈夫な筈だ。
しかし、落ちた時、上に大ムカデが覆い被さっていた。剣に奴の全体重が掛かる羽目になって、さすがにちょっと無理があった。
術がオーバーヒートなんて初めてだ。カワセミ、いつもこんなに気持ち悪い思いをしているんだな…。

「……どこだろ?-?」
灰色の葉っぱが重なった小さなドームの中にいた。身体の下は柔らかい寝床みたいだった。
「気が付かれたようです」
声がした。いきなり視界一杯に、立派な髭面が現れる。
「長老……」
先日会った、東の森人の長老だった。
「大ムカデと一緒に崖下で倒れていらっしゃいました。あの高さから落ちて無傷とは驚きですじゃの。さすがは蒼の狼殿のお連れですな。我らの薬がお役に立ったかは分かりませぬが…、気分はいかがですかな?」
「あ……有り難うございます…」
助けて貰ったのは有り難いが、狼は狸親父だと言っていた。用心しなきゃ…と思う若者の心ぐらい、長老は見抜いていた。
「もう、何もしませんじゃ。要望は果たして頂きましたのでの」
「は……?」
「大ムカデを退治して頂きましたのでの。皇子の身柄を預かって、引き替えに、狼殿にお願いしようと思っておりました」
ツバクロは信じがたいという表情で起き上がった。あちこち痛いが、折れてはいないようだ。
「それ位…、角を立てなくとも、素直に頼んでくれれば…」
長老は目を細めた。
「やはりお若い…。狼殿にそんな事を頼んでご覧なさい。あの方は根はお優しい。我らの弱い者が犠牲になっていると知ると、尚更、骨折ってくれるでしょう」
ツバクロもそう思う。
「そうするとな、他の部族からは、『狼はあの部族と特別に繋がっている』となるのじゃの」
「……」
「だから、理由が要るのじゃ。子息を人質に取られたとなれば理屈が立とう」
「……」
「難しいですかの?」
「…はい……」
「いつか解って下されば良い…」
若い森人が入って来て、ツバクロに飲み物を勧めた。
「有り難いけれど…、頂けません、師の教えですので」
長老は膝を叩いて笑った。
＊＊＊
ツバクロが立ち上がってドームを出ると、他の森人が掌を組

んで頭を下げていた。
「貴方も直(じき)、狼殿のように、立派な外交官になられるのでしょう」
「……僕、そんなに凄くなれないですよ。狼殿みたいに、迫力があれば、なれるんでしょうが」
長老はじめ森人達は一拍止まり、そしてその後、木霊のように笑い出した。
「我らがあの方の迫力に押されて契約しているとお思いか?」
「え…?」
ちがうの…?
長老は笑いながら言った。
「あの方が初めてここへ来られた時は、まだほんの子供じゃった。あの皇子殿よりも小さな…」
「……」
「我々は鼻にも引っ掛けなんだ。他国から来た子供が何を戯言を…と」
ツバクロは茫然と突っ立っていた。自分が思っていたのと、根本的に違う? 小さい子供が、初めての土地で、他国の部族に、我が君への協力を頼んで回るって? 聞いて貰えないどころか、無謀過ぎるだろう?!
「…それ…で…? どうして? 何か切っ掛けがあって、契約を結ぶように…?」
長老は、他の森人と顔を見合わせた。
「さあ…どうだったかの? まあ、強いて言えば……慣れ、ですかな…」
「…は…? 慣れ…?」
「何回も何回も来られたのじゃ。その内、挨拶を交わし、酒を酌み交わすようになり…。もっともあの方は、少しでも混ぜ物のあるモノは鋭く見分けておられたがの」
長老は悪びれなく笑った。
「お前さんはあの方は迫力があると言った。それは初めからでなく、我らとの積み重ねの内に育まれた物じゃ。我らはそう思うがの…」
森の端でざわめきが起こった。蒼の狼が草の馬と共に立っていた。相変わらずの凍り付いた表情で、長老に進み出る。
「森人の長老殿、身内が世話になりました。感謝します」
「なに、ひとつ貸しを作れてホクホクじゃよの」
蒼の狼は、ツバクロに、自分の後ろに乗るよう促した。
「僕の馬は…?」

「脚は挫いていますが、大丈夫です。四、五日で回復しますよ」
狼は馬を上昇させた。
ツバクロは落ち込んでいた。馬を怪我させるのは、蒼の一族にとって、最も恥ずかしい事だ。
「すみません…。ワタシのせいです…」
狼はポツリと言った。
「貴方が発ってすぐ、あの子が問い詰めて来たんです。大人同士の話だから首を突っ込んでは駄目…って言い方したら…、大人だったら、大事なヒトを傷付けて、何も教えてくれないのか?! って叫んで…。貴方の事、そんなにも好きだったんですね。ワタシの考え足らずのせいで、貴方を危険な目に遭わせ、貴方の馬を怪我させてしまった。ワタシが気を付けていれば…」
ツバクロは顔を上げた。
「貴方は、何でいつも、そんなに背負い込んじゃうんですか?」
「……」
狼のうなじに緊張が走るのが分かった。でもツバクロは言い始めた事を言い切る覚悟だった。
「僕の馬の事は僕の責任です。幾らでも手はあったのに、馬に負担をかけるやり方をしてしまった。そもそもキビタキが飛び出したのだって、僕が子供みたいに不用意に傷付けたからで…。僕こそ大人らしく振る舞うべきだったのに」
ツバクロは勢いに任せて、この際、いつも思っている事も口にした。
「そんな風に、いつもいつも、自分を責めてちゃ駄目です!! 眉間の縦線が凍り付いちゃいますよ!!」
狼がずっと黙っているので、強く言い過ぎたかな…? と、不安になった。
少し沈黙があって、狼はポソリと呟いた。
「変な感じですね……」
「は…?」
「蒼の一族の若者に…そんな風に言われる日が来るなんて…、夢にも思いませんでした」
砦に戻ると、キビタキが、傷付いた馬に一生懸命湿布を施していた。ツバクロを見ると、何も言わずにその懐にしがみ付いた。
ツバクロは、少年皇子の背中を撫でてから、ひざまずいて馬に話し掛けた。
「すまなかった、ゆっくり休んで、怪我、治してな」
馬はフルルと頷いた。

キビタキが何か言おうとした所で、王が城壁に上がって来た。マントを翻して、ツバクロの真正面に歩いて来て止まる。

二人、睨み合う。ツバクロは負けずに目を逸らさなかった。

「……感謝する……」

王が目を閉じて静かに頭を下げた。

呆気に取られたツバクロに何も言わせないまま、王は続けて蒼の狼に話し掛けながら、踵を返した。

「使者殿はお帰りだ。いつも通り内偵して。俺は西の郷へ行く。夜には戻る。トルイ…」

「はいっ」

皇子は緊張して立ち上がった。

「同道しなさい」

「は、はい!!」

皇子は飛び上がって父に続いた。振り向いて、ツバクロに、後でね…と声に出さず言う。

ツバクロは見送るしかなかった。

残されたツバクロは蒼の狼と気まずかった。

「あの子ね……」

沈黙を破ったのは狼だった。

「飛び出してはみたけれど、思い直して、馬だけはすぐ帰したんですって。草の馬一頭が戦局に重大に関わる…って教えられていたのを、しっかり覚えていたらしくて。それで、森でね、小鳥の卵を探していたって…、貴方の真似をしようと。余程貴方の事ばかり考えていたのですね」

「…はあ……」

そういえば前日、中洲の小鳥の卵を孵した話をした。だからって…。

「で、小鳥の卵だと思って近付いたら、大ムカデの卵だったんですって…」

「……」

「まったく、何て幼稚でドジなの？　どちらに似たのだと思います？」

「え……？」

何だか…どっちにも似ていない…。

「どちらかと言うと……」

狼は興味深げにツバクロを見る。

「長に似ていますね」

狼は吹き出した。

「ふふ……あはは…そうかも！」

初めて笑い顔を見る。笑うと、長に似ている…と思った。
狼は気を取り直して城下を見下ろした。王が皇子を伴って出立する所だ。
「良かった…。一日に二回も不始末をしでかして、王に本国へ送り返されるんじゃないかって、ビクビクしていたんですよ。ワタシもその可能性はあると思っていました。連れて来るには子供過ぎた…って」
ツバクロもそう思う。出来れば王にはそっちの選択をして欲しかった。やっぱり、早く利用出来るまでになって欲しい…って思っているんだろうか?
「嬉しそうに同道して行ったでしょう」
「あ、ああ、…ええ……」
「自分が生まれた事に意味がある、自分は必要とされている、って実感していたいんですよ」
「……」
狼は王の隣の小さな騎馬を、愛しげに見やりながら言った。
「そういう所はワタシに似ているのかもしれません…」
貴方も打撲をしているんです。後で手当てに伺いますから部屋で休んでいて下さい…と言い残して、狼は使者の内偵に飛んで行った。
ツバクロは薄暗い小部屋に戻る気にならなくて、馬の足元に座っていた。見知らぬ土地で怪我をしたら心細いのは、ヒトも馬も一緒だ。
夕空を見ながら色々考えた。王の事、狼の事、キビタキの事、長老の事、……そしてカワセミに言われた事……。
里で、長の弟子一直線に生きて来た自分には、解っていない世界がまだまだある……。
＊＊＊
肩にヒンヤリした感触を感じて、目が覚めた。目の前に蒼の狼の白い顔がある。
ツバクロはビックリして飛び起きた。肩の湿布が滑り落ちる。いつの間にか自室の小部屋にいた。自分で歩いて戻った覚えはない。
「あの…、貴方が、運んでくれたんですか?」
狼は肩の湿布を直しながらサラリと言った。
「王が」
「お、王が?!」
「妖精って男でも軽いんだな…とか言いながら」
何だか屈辱だ。起こしてくれればよかったのに…。

「皇子も今さっきまでいたんですけれどね。明日は朝一番にお礼を言わせてやって下さいな」
「…はい…」
「…じゃあ、おやすみなさい」
狼は立ち上がった。
ツバクロは脳が半寝だったせいだろうか…？　いや、そんな言い訳は通らない、トンでもない言葉を口走った。
「王の所に…行かないで下さい！」
「……」
狼はゆっくり振り返った。燭台の灯りが逆光になって、表情が見えない。
「貴方を利用している…なんて、平気で言うヒトの所へ、…貴方が行くのは、……嫌です！」
狼は青年に正面を向けた。あの夜みたいに静かな微笑みを浮かべている。
「王には、ワタシが、必要なのです」
「利用しているなんて言われてもですか？」
狼はそれには答えず、少し間を置いて言った。
「キビタキ…あの子、うなされるでしょう……夜…」
「ああ……」
確かに…キビタキは最初の夜だけでなく、里でも何回かカワセミの世話になった。
「そこの所は王に似たんです。王もよく悪い夢を見ます。側にいてあげなくては、何時までもうなされているんです」
あの王が？　ちょっと信じ難い。
「…キビタキは貴方が心配で夢を見るって言っていた。あのヒトも？」
狼は首を小さく振った。
「子供が見るのは未来の不安…。でも、大人が見るのは、過去に現実に起こった悪夢です」
「……！」
「そうね、貴方が昼間言った、ビジョン…？　っていうのですか？　手を握っていると、たまに見えます。あのヒトの、母親が、兄弟が、同郷の一族が、どんな最期だったか。そしてあのヒト自身がどんな目に遭ったか…」
「……」
半身起こしたまま寝具を握りしめているツバクロに、危うい顔を見せたくないのか、狼は燭台を遠避けた。
「あのヒトは、自分が統治する事によって、そういう事を起こさせない国を作る事にしました。でもね、あのヒトは夢に見る

んです。そうして、世界の何処かで同じ目に遭っている者がいると思うと、苦しくて…居ても立ってもいられなくなる。博愛主義とかそう言うのとも違う。一種の、呪いのようなモノです」
ツバクロは一言も言葉を返せず、握りしめた寝具を見つめていた。
狼は戸口に立ってまた逆光になった。
「そういう目に遭う人を無くするのがあのヒトの目的…。あのヒトが悪夢を見なくするのがワタシの目的…。おやすみなさい……」
狼は廊下の向こうの闇に消えた。

翌日、ツバクロは愛馬の足元に座って一日過ごした。
王も狼も忙しく飛び回っていてロクに顔を会わせなかったし、キビタキも朝はツバクロの所に来たが、基本王の横だった。
このまま何日か過ごすと思うとウンザリだ…と情けない気持ちになりかけた夕方、救世主のように、蒼の長が来た。
「長ぁ〜〜〜!!」
「おやおや、どうしたんですか？　しばらく見ない内に甘えんぼになって。王は何処です？　挨拶をせねば」
長は戦場とか軍義とかお構いなしに、ドカドカと王の執務室に踏み込んで行った。
王はいささかウンザリして家臣に言い渡した
「……風が話をしに来た。人払いを……」
キビタキも人払いされて、城壁のツバクロの所へ来た。
「ツバクロ…、行っちゃうの？」
「ああ、今度は笑って見送って貰えるな」
「うん、俺、ずっとツバクロの事…、ノスリやカワセミや里のみんなの事、考えてる。一時も忘れないよ。みんなに心配かけない、役に立てる者になれるよう。次逢う時は、きっとそんな自分になっているよ！」
「ああ、そうだな。なれているともさ。僕達が名前を授けた、君なら」
長が話を終えて戻って来た。何でか、ツバクロの馬が怪我をした事を知っていて、予備の馬を連れて来ていた。ツバクロの馬にはオタネ婆さん特製の膏薬を塗って、呪文を施す。
王と狼は見送れなかったが、キビタキが手を振ってくれれば充分だった。

ツバクロの道案内でジェット気流に乗った。草原の少し手前

で、気流を外れて高度を下げた頃は、もう星空だった。
「貴方の馬がもう少し休んだ方が良いのは分かっていましたが。貴方が一杯一杯なんじゃないか…って思いましてね」
「どうしてそれを？」
「あの子が手紙をくれましてね」
「…狼…？」
「王とやり合ったそうですね」
「……」
「さすが、私の一番弟子です」
「……こてんぱんでした…」
「やりあう事自体に意味があるんです」
長はすまして馬を進めた。追い風に乗っているとはいえ、ツバクロの馬を労りながらなので、三頭の歩みは遅い。
「私までいない分、残った二人がフル回転です。帰ったらその分働いて下さい。特にカワセミは、十中八九ぶっ倒れるだろうから」
「はい…」
南方の湿った空気より、故郷のキンと冷えた乾いた夜風の方が、やはり性に合う。ツバクロは身体中でホッとした。
長は安堵の表情の弟子を見て、静かに切り出した。
「…私だってねぇ…、自分が楽をする為に、貴方がたを育てたんですよ」
「…長…？」
「言っちゃえば、そうです。貴方がた、それで、自分達が可哀想とか思いますか？　ヒトにそう思われたいですか？」
「……いえ…」
「要するにね、物には色んな言い方がある…って事です」
「……はい……」
「まだイマイチくすぶっているようですね。この際、どんどん言っちゃって下さい」
ツバクロは、王とのやり取りの一部始終を長に話した。王に剣を向けそうになった事も、自分を捨てる勇気がなかった事も……。
長は黙って最後まで聞き、少し間をおいて言った。
「不器用さんですねえ……。そして、おばかさんです…」
「…王が…ですか？」
「ええ」
長は星を仰ぎ見ながら続けた。
「自分が悪役になれば、妹が蒼の里の者に受け入れられ易いん

じゃ…って思っているんですよ。実に浅はかです…」
「えっ…？」
「彼も…自分の寿命とあの子の寿命の違いを考えているんですよ。自分がいなくなった後の事を」
「……」
「おばかさんですよね。ホントにそんな酷い男だったら、蒼の妖精が着いて行くものですか。私の妹はそんな男の側にいる程愚かじゃありません。まったく、妹の尊厳をどうしてくれるんでしょう？　それを許した私の立場も…」
　長はツバクロを振り返る。
「そんなのをマトモに受け止める貴方も……ですよ」
「はい……すみません…」
　ツバクロは恐縮した。でも、心の隅っこで嬉しかった。実は…今気付いたんだが、初対面の時、既に王を好きになっていた。

　三頭の馬は星空をゆっくりゆっくり歩んで行った。
　長はもう一つ思う所があった。王は、結構本気でツバクロに挑んだのだろう。自分のいなくなった後、大切なヒトを託す里の者が、王相手だからって尻込みしているようでは困る。長の後継者なら尚更だ。そしてツバクロは……多分、王のお眼鏡に、叶った……。
「さすが、私の一番弟子ですねえ…」
「え？　何ですか？　いきなり？」
「いえ…、さ、とっとと帰りましょう。カワセミがぶっ倒れない内に」
　ツバクロはポケットの小さな花の種を触る。
　あれは多分、荒れ地に咲く金鈴花(きんれいか)だ。里で根付くだろうか？　でも、次に来た時、キビタキに見せてあげたい。出来れば、あの女性(ヒト)にも……。
　三頭の馬は寄り添ってゆっくり進む。
　ゆるゆるとした天の川の下で……。

～おしまい～

二〇〇九・九・某